

●対談——童門冬二 & 安部龍太郎

群雄割拠の戦国時代。国の存続を懸けた武将たちの戦いの熾烈さは、平和ないまの時代の想像を遥かに超える。生と死の狭間で、彼らはいかに運命を切りひらいたか。作家の童門冬二氏と安部龍太郎氏に語り合っていた。

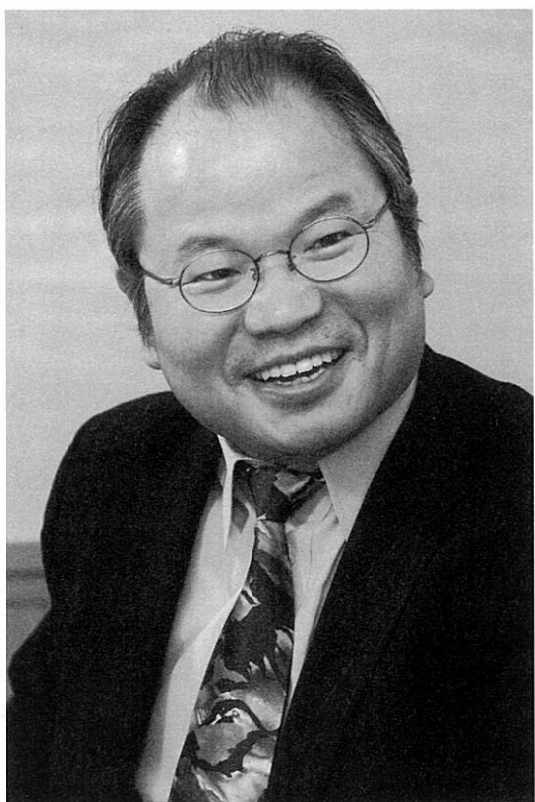


作家
童門冬二

どうもん・ふゆじ 昭和2年東京都生まれ。東京都庁にて広報室長、企画調整局長等を歴任後、54年に退職、本格的な作家活動に入る。第43回芥川賞候補。平成11年勲三等瑞宝章を受章。歴史に題材を求めながら、組織と人間をテーマに据えた作品には定評がある。著書に代表作『小説上杉鷹山』をはじめ『松陰語録』『小説佐藤一斎』など多数がある。

戦国武将はいかに運命を

切りひらいたか



作家
安部龍太郎

あべ・りゅうたろう 昭和30年福岡県生まれ。久留米高専卒業後、図書館勤務を経て小説家に。平成2年日本史を網羅した短編集『血の日本史』でデビュー。平成6年発表の『彷徨える帝』は山本周五郎賞と直木賞の候補に。他の著書に『関ヶ原連判状』『信長燃ゆ』『生きて候』など多数がある。

時、今後は土地争いのための私戦を禁ずるとの命令を出して、このことを京都に来て天皇に誓えと言出した。天皇に誓えというのは、すなわち秀吉に誓え、忠節を尽くせということになるわけで、これに従わなかったのが薩摩の島津、四国の長宗我部、小田原の北条、それから陸奥の伊達の四人でした。

秀吉は彼らを天皇の命に従わない逆賊として征伐することにします。長宗我部、島津、北条を次々と叩いて、伊達を攻める前に改めて警告するわけです。いまからでも遅くないから謝りに来いと。政宗に好感を持っていた徳川家康や前田利家たちの説得もあって、政宗は小田原へやってくるんですが、

秀吉は相当怒っていて、政宗を閉じ込めてしまおうですね。そしてここが伊達流のハッターリなんでしょうけれども、政宗はそこで、今の思い出に茶を習って死にたい、ぜひ千利休殿のご指導を得たいと言う。家康と利家を取りなして、秀吉が会おうということになった。面会の日、政

ローカルにあつてもグローバルに

童門 運命を切りひらいた戦国武将ということ、僕なんかますます頭に浮かべるのは、伊達政宗と鍋島直茂です。明いひらき方をしたのが政宗で、暗いひらき方をしたのが直茂。対照的だなと思っっているんですよ。

安部 政宗のほうからお聞かせください。

童門 伊達家はもともと茨城県の出なんですけども、源頼朝が東北を制圧する時に随行して功績を上げたので、東北を治める奥州探題に命じられたわけです。政宗もそういう意識が非常に強いし、実際に力も持っていたから、織田政権、豊臣政権を認めていない。つまり東北だけでやっていけるといいう自信を持っていたわけですね。ところが豊臣秀吉が天下人になった

宗はちよんまげを切り、真つ白な死装束で秀吉の前に出ました。秀吉は政宗の肩を鞭で叩いて、「小僧、危なかったな。もう少し遅ければ首が飛んだぞ」と不問にした。

安部 九死に一生を得たわけですね。童門 政宗はその一件で目がひらかれたんですね。奥州だけでまとまっているのではなく、やはり広く日本の国政全体を視野に入れなければならぬ。天下というのはそういうことなんだなと。ここは抵抗するよりも、その指揮下に入って自治を保っていったほうが得策だとギアチェンジする。ここが、

政宗が運命を切りひらく転機でしたね。そこから、ローカルにあつてもグローバルに世界に進出していこうという、伊達家のグローバルな活動が展開されます。支倉常長をローマ法王庁に送り、独自に石巻を国際港にして国際交流を図る。徳川政権とは別個に地方自治体として発展を試みた。いまに通ずる地方自治対中央政治という繋がりを発見して、二人三脚で歩いていくことがそこに住む人々のためになると考えたわけです。

他大名と一線を画す——独自の視点

童門 鍋島の話は後にして、安部先